

生涯教育研修活動報告書

病理検査研究班

- 1 実施日時：2023年11月24日 18時00分～20時15分
- 2 会場：Web開催 教科・点数：専門教科－20点
- 3 主題：甲状腺病変 ～超音波検査・細胞診・組織診からのアプローチ～
- 4 講師：田名見 里恵（医療法人社団愛友会 上尾中央総合病院）
藤沢 美穂（社会医療法人財団石心会 埼玉石心会病院）
亀山 香織（昭和大学横浜市北部病院 臨床病理診断科）
渋谷 樹（さいたま市立病院）
- 5 協賛：なし
- 6 参加人数：会員 263名 賛助会員 0名 非会員 1名（亀山医師）
- 7 出席した研究班班員：（生理検査）南雲涼太 工藤淳子 横尾愛 小宮山英幸 新井雅人
（細胞検査）鶴岡慎悟 急式政志 船津 靖亮 野本伊織 猪山和美 稲山拓司 加藤智美
小川弘美 並木幸子 （病理検査）関口久男 森田繁 高橋俊介 小島朋子 細沼佑介
今村尚貴 遠山人成 松本祐弥 三鍋慎也

8 研修内容の概要・感想など

今回は生理、細胞、病理の3班合同研修会として、甲状腺病変をテーマに開催した。

田名見氏は、甲状腺結節の超音波診断基準を中心に、超音波画像を豊富に提示し、わかりやすく解説した。超音波診断基準の主所見として、結節の形状、境界の明瞭性・性状、内部エコーのエコーレベル・均質性を見極めることにより、良性か悪性かの推定を行うとのことであった。充実性部分の大きさについて、一般的には大きいものほど悪性を疑うが、小さい病変でも悪性の場合があり、大きさに惑わされず、確実に所見を捉えていくことが大切とのこと、これは細胞診において細胞所見を着実に判定していくことに類似していると感じた。

藤沢氏は、細胞診標本作製のコツから、良性・悪性病変、実際の標本の見方や報告様式に至るまでを講演した。甲状腺の標本では、しばしば濾胞上皮細胞が多量の血液に埋没し観察が困難である場合があり、対策として、塗抹時に液体成分を紙に吸収させることが大切とのことであった。また、標本の見方としては、まず背景（血性、コロイド、リンパ球、壊死、泡沫細胞等）を観察し、次に細胞集塊（シート状、乳頭状、小濾胞、孤立等）を捉える。続いて

出現している濾胞上皮細胞の核構造（核内細胞質封入体、核溝、すりガラス状、粗顆粒状等）を見極め、細胞質の性状（好酸性、紡錘形等）を確認する。これらを総合的に判断し、良悪性の鑑別や組織型の推定を行うとのことであった。

亀山医師は、甲状腺病変について病理組織学的に、また遺伝子変異についても併せて解説した。甲状腺腫脹の約 80%は腺腫様甲状腺腫で、この病変は過形成性であり、大小の濾胞、濾胞上皮の密な増殖、線維化、石灰化、嚢胞形成等様々な組織像を呈することを、画像を交えて解説した。また、甲状腺癌の約 90%は乳頭癌で、細胞診で観察される特徴的な細胞像が組織像でも裏付けされた。乳頭癌では BRAF 遺伝子の変異が 30~90%の割合で見られることもわかった。

渋谷氏は、症例検討として2症例を提示し、いずれも腺腫様甲状腺腫を背景に持つ濾胞腺腫と乳頭癌を解説した。良性の腺腫様甲状腺腫と悪性の乳頭癌が混在し、乳頭癌成分が少ないとすれば、細胞診では悪性寄りの判定とすることは難しいが、超音波画像の情報を読み取ることができれば、より強めの判定が可能となる確率が上がるとのことであった。

超音波画像、細胞診、病理組織の情報を総合的に考えることにより、検査の正確度を高めることができると、3班合同研修会では毎回思うところである。日常業務においても相互情報を積極的に取り入れ、患者さんにとって有益な検査結果を提供することを期待したい。

提出日：2023年11月28日

文責：三鍋慎也